

1960年代は「量」の世界であった。GNP 神話に支えられた日本の高度経済成長政策は、その端的な表われである。しかし、「量」の世界は、いま厳しい反省をせまられている。

GNP は、すべてを量として計量してしまう。煤煙をあげた工場の生産量はもとより、それによって被害をうけた住民の洗濯をするクリーニング屋の収入から、公害病の医療員まで、すべては GNP の増大として量的に表示される。おまけに、この煤煙の規制をするための公務員の給料から、集塵機をとりつけることになれば、その生産額もまた GNP に算定される。かつて、笠信太郎氏は『花見酒の経済』の中で量的経済のあやまった姿を端的に指摘した。花見酒はそれでもいい。アルコール中毒にでもならなければ、ストレスを解消し何ほかのレクリエーションに役立ったはずだからである。ところが量的世界の反省は、たんに「見かけ上の量」が実質的にはより少ないものであったというだけにとどまらない。収入が15%上がるがインフレが5%あったというような場合、実質所得の上昇は10%にとどまったわけである。しかし、10%にせよ、実質収入の上昇があったのだから、それだけの満足はあったはずである。そのように「見かけ上の量」がややオーバーに表示されていたというだけで、ほかに何らの影響がない、というのが、いままで量的世界を支えていた神話であったのである。だから実質をふやすためにも、何がなんでも量的拡大をはかるべきであるというのが、これまでの流れであった。

ところが、そのような量的拡大が他に影響を与えないという前提はいたるところでくずされてきた。それは、すでに度々、各所で指摘されているとおり、さまざまな環境汚染、環境破壊となって表われてきているのである。大気汚染、水質汚濁、騒音、振動、交通災害、等々。これらはたんに「見かけ上の量」を少なくさせるというよりは、もっと根本的なわれわれの生活の基盤を食いあらしているのである。それらは量的世界の計算にのらないところで、あまりにも当然のこととして、われわれの気のつかなかった大切な資源をいつのまにか食



THE QUALITY OF THE URBAN ENVIRONMENT

Essays on "New Resources" in an Urban Age

edited by

Harvey S. Perloff

Copyright © 1969 by Resources for the Future Inc., Washington, D. C.
Published 1971 in Japan
by Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
Japanese translation rights arranged with Curtis Brown Ltd., London
through Charles E. Tuttle Co., Inc. Tokyo

いちぎり、浪費してしまっていたのである。

いったい、空気、水、太陽などというものは、経済学でも自然財として、全く費用のかからない無限にあるものとされていた。これらは、それなくしては人間は存在しないが、取引の対象とはならず、無限にあるのだから経済財ではなく、それらに費用がいるなどとは考えてもみなかった。これらのうち、水は、特定の場所を流れ、地勢か、地形、天候に左右されるから、水利権という考えを発生させ、あるていど経済的な対象になったり、水道という施設を要して、これに金を支払うことが生まれていた。しかし、それでも「湯水のごとく費う」という表現は生きていたし、他とは比較にならない安いものとして理解されていた。まして空気に金がかかるなどということは、病人の酸素吸入以外に考えられなかったことだろう。しかし、今や空気を清浄にするためには、莫大な費用がかかることが認識されており、学校に酸素吸入器がそなえつけられたり、喫茶店では、金を支払ってこれを吸入する姿まで現実にもみられるようになっていたのである。

量的世界の拡大は、このように、今まで計算外であり、われわれが無料だと思っているものを食いつぶすことによって成立していたのである。しかも、公害や環境汚染に示されているように、量的世界の拡大は、われわれの周辺環境の質的破壊につながることを示されてきた。したがって、もし、このまま量的世界の拡大が続けば、単に見かけ上の多少の問題ではなく、根本的生活基盤を失い、破滅への道をたどるものなのである。とくに、これらの根本的な矛盾は、われわれの身のまわりにあった環境に生じたし、それらは、最も過密である都市環境に厳しく現われたのである。

1970年代は、これらの反省のうえに立って、「量」から「質」への時代といわれ、あるいは、「環境の時代」といわれる。たんに量的拡大のみを追求するのではなく、それが質的に意味のないかぎり、かえってマイナスになるのである。いや、マイナスのみに終わらない、それは、もしかすると、人間を決定的破滅へおいやる道なのである。

GNPは年間の総生産量というフローとしての量である。そのため、蓄積、あるいは資源に対しては、何らふれていない。しかし、GNPだけでなく国富統計といった、蓄積を示す統計も、またひとつの量にすぎない。そこには、いままで見すごされてきた、水も、空気も、太陽も計上されないのである。ましてや、気持のよい眺め、たのしい自然なども計上されない。これらはまだまだ「質」的世界に入っていないのである。われわれは、GNP世界の反省により「量」から「質」を考える立場に立つわけだが、この場合、新しい資源をみなおす必要が生じたのである。金や、銀、鉄、ウランといったものだけが資源ではない。実は、この地球というすばらしい環境そのものが、人間にとって最上の資源であることに気がつくのである。

宇宙飛行士がのべたように、「地球は、広大な宇宙の砂漠の中に浮かぶ青いオアシスなのである。」そのような地球という環境そのものが、何ものにもまして、人間にとっての最大最良の資源である。寓話にもあるとおり、すべて手でさわるものが金になるという金びかにかざられた王宮は、人間にとって、食べることも、飲むこともできない劣悪な環境である。

中央アジアのオアシスは、カレーズという深い溝を掘り、砂漠の中のわずかな水をしぼりだしてオアシスに導いた。それはまさにオアシスの生命線であった。これは厳重に管理され、守られてきた。

カレーズをとおってくる水は、ごく少ないものだけに、その貴重なことが全部の住民に理解されていた。しかし、青い地球というオアシスは、あまりにも恵まれていただけに、かえってその恩恵に気がつかなかったのである。量的に偏した拡大は、われわれのもつ貴重な資源を食いつぶすことによるのみ可能だったのである。

このような人間の環境に対する反省は、量的拡大に傾斜してきた日本ばかりの問題ではなかった。人口密度も低いうえに高所得水準の福祉国家であるスウェーデンでさえ、死んだ鳥の中に有機水銀が検出されたり、水中の魚にも有機水銀が検出されておりその濃縮が行なわれている。南極のペンギン鳥にさえ、DDTが検出されるのであるから、地球のすみずみまで、この地球の環境は荒

されかかっており、これをどう守るか重大な場面に立たされているのである。

とくに、経済構造の変化により、人間のほとんどが居住すると考えられる都市の環境は、われわれにとってきわめて重大な意味をもっている。この都市環境は、かつては経済の量的拡大の象徴であり、文明の象徴であった。今後は、その都市環境は、人間の住みうる環境として、また人間の住むにふさわしい環境として、さらには、人間をよりよく向上させる環境として、その質的向上を考えてゆくべきであろう。

この訳書の原名は「都市環境の質」(The Quality of the Urban Environment)である。量から質への時代を迎え、そのなかにかこそ、今後の人間の生命と、人間社会を維持し人間環境の都市をつかってゆくことが強く要望されているときに、この論文集は、70年代以後のわが国にとっても、ひとつの示唆を与えてくれると思う。

本書は、このような質を問題にするとき、都市時代の資源というものを、今までの資源概念と違って新しくみなおそうとするものである。内容は、概念規定を追った観念的なものもあるが、それは、「質」という計量しにくい難かしい問題にとりくもうとする新しい視点のためには、ぜひ必要なことであろう。われわれの周辺の環境のすべてに新しい光をあてなおさなければならない時がきているのである。それなくしては、都市の中の人間の生活を語ることも、都市計画を行なうことも、都市の建設に従うことも、都市行政にたずさわることもできないのである。

なお本書は、本来九編の論文をふくむ論文集であったが、紙数の都合と、内容が一般論よりはアメリカの特定問題をより多く論じている、アーヴィン・ホッホ (Irving Hoch) と、ベリイとネイル (Brian J. L. Berry and Elaine Neils) の2つの論文は都合により除いた。

また訳出に当っては、下記の諸氏により、各論文を分担訳出し、内容、文章についてはそのうえで田村が手なおしを行なった。

そのほとんどの諸氏は横浜市という自治体の行政の中で、都市環境の「質」

をどう向上させるかについて、具体的に日夜努力している諸氏であり、本書の問題は決して他人の問題ではないのであり、また市以外から参加された二宮氏も同様である。これらの人々が忙しい業務のなかから、この訳出に協力してくれたことを深く感謝したい。

序、第1章 田村 明 (横浜市企画調整室長)

第2章 宮腰繁樹 (横浜市下水道局下水道部計画課長・昭和8年生・東大土木学科卒)

第3章 池田武文 (横浜市企画調整室企画課員・昭和18年生・東大都市工学科卒)

第4章 二宮公雄 (二宮事務所所長・昭和11年生・東大建築学科卒)

第5章 藤本孝昭 (横浜市道路局建設部高速道路課主査・昭和13年生・京大土木学科卒)

第6章 水島敏彦 (横浜市企画調整室企画課員・昭和17年生・慶大経済学部卒)

第7章 内藤惇之 (横浜市企画調整室調整課主査・昭和15年生・日大建築学科卒)

終りに、この訳出にあたって終始いろいろ励ましを与えられた鹿島出版会の植松重信氏に、厚く感謝したい。植松氏の熱心な励ましがなかったなら、日常の都市行政に追われる業務の中で、このような訳業を行ないえなかったからである。

1971年11月

田 村 明

編者紹介

ハーベイ・S・パーロフ (Harvey S. Perloff)

経済学者, 都市計画家

1915年生れ

ペンシルベニア大学, ハーバード大学卒

1947-55年 シカゴ大学社会科学教授

1953-54年 T V A コンサルタント

1955-61年 未来資源協会地域研究計画部会長

1965- アメリカ科学芸術アカデミー2000年委員

現在 米国連邦政府住宅都市開発省, 健康教育福祉省コンサルタント

カリフォルニア大学都市計画・建築学部教授 (ロサンゼルス校)

著書 *State and Local Finance in the National Economy* (1944年)

Regions, Resources and Economic Growth (1960年)

Planning and the Urban Community (1961年)

How a Region Grows (1963年)

Regional Economic Integration in the Development of Latin America (1963年)

Design for a Worldwide Study of Regional Development (1966年)

Issues in Urban Economics (ed. with L. Wingo) (1968年)

監訳者紹介

田村 明 (たむら・あきら)

1926年 東京生れ

1950年 東京大学工学部建築学科卒

1953年 東京大学法学部法律学科卒

1954年 東京大学法学部政治学科卒

運輸省, 日本生命, 環境開発センター, 横浜市企画調整室企画調整部長を経て

現在は, 横浜市企画調整室長。

著書 「人工土地論」(現代デザイン講座第5巻一デザインの方法) 共著/風土社

論文 「環境の質と公害」(別冊経済評論) 日本評論社

「建築と公害」(新建築) 新建築社

人間環境都市

¥ 1700

昭和46年12月25日 発行 ©

訳者 田村 明

発行者 河相全次郎

発行所 東京都港区赤坂六丁目5番13号 鹿島研究所出版会

Tel (582) 2251 振替 東京 180883

落丁・乱丁はお取替えいたします。奥村印刷・加藤製本

3336-321022-0927